

すきまの風

土田龍太郎

今昔物語の名知らぬものとはありまじけれど、これいついかなる人の筆になりにつむ、いとしも定かならず。この物語集にたぐへつべき宇治拾遺物語古今説話集など今に傳はりたり。古本説話集といへるは梅澤記念館の藏むる古鈔本なれど、近き世にはじめて人の目にとまりしときはやまことの題號失はれて久しかりければ今はただかりそめに古本説話集と呼ぶを習ひとす。これらの物語集の祖もとつ典ふみを尋ねむとせば、いづれかの源隆國の編めるなる宇治大納言物語に至りなむこと推し測るに難からねど、この物語とく散佚して今に遺らねば、かれこれあひ關りけむさまつばらに解き明めむことえしもかなはぬこそうたてほいなけれ。

そはともかくもあれ、今昔物語にては六宮の姫君といひ古本説話集にては曲殿姫といへる女をみなのあはれなることたぐひなければここにとりわきてけみせまほしくぞおぼゆる。今昔物語と古本説話集おのおのこの姫につきてつばらに語ることかたみにさしも異らず、幸ひうすきその一期のありさまおほかた左のごとくに説かばかつごとたらひぬべし。

今は昔ある古宮腹の御子にて五條わたりもしは六宮に住めりし兵部大輔某といふ人の娘うつくしきことよなかりしかど、父と母とうちつづき失せにしよりよろづ心ぼそきままによるべなき身をかこちあたりしが、乳母にゆかりありし某の前司の子なるあて人かよひそめしよりやがてたのもし人となりてねもころなる仲らひとぞなれりける。しかるにこの男君、父に伴ひてはるか陸奥國に下らではやむまじき仔細ゆくりなく出できにければ、姫君にねもころに契りおきて心にもあらで都を去りにしぞあいなかりける。陸奥に著きて後、はかばかしき便りの思ふにまかせぬままに五年ほど過ぎぬれど、拒みあへぬままに常陸守の婿にとられてさらに三四年経て後、やうやく都に還ることをえたり。旅装束のままにてとりもあへず六の宮に急ぎ行きてみるに、姫の住まひたりし家屋敷の跡だに遺らず知る人とはさらに見えず、姫に仕へゐたりしはした女の母なる尼にからうじてめぐりひぬれども、この尼、姫のいづかたに隠ろへたるたや、行くへも知らずなりぬるよし泣く泣く申しければ、男君せむすべ知らにあてどもなく都の中を尋ねありくほかなかりけり。あるとき朱雀門の前の西の曲殿といへるところに立ち寄りたれば、連子の内に老いたる尼とともに若き女の瘦せ枯れて色青み影のやうなるが破れたる筵やをひき被り臥しゐたり。うち見るにこれまさしく我が尋ぬる女君にてぞありける。いみじくあてにらうたき聲してたまくらのすきまの風も寒かりき

身はならはしのものにぞありける

とばかり獨りごてるさまいともはかなげなり。男君あさましきままにつと寄りてかき抱けば、姫顔を見合せて、はやう遠く去にしわが君なりと知るからにいかにも耐へがたくやありけむやがて息絶えにけり。男君悲しむことかぎりなし、家にも還らでただちに愛宕護山に行きもじり髻切りて法師になりけりとぞ。

今昔と古本説話の祖本にてありけむ宇治大納言物語にすでに六宮の姫君のこと右に掲げし一首ともどもし載りたりやいなや、この物語集失はれて久しければ今知らむにさらにたよりなし。

ここにいささか心とめであるまじきは、長徳年間に藤原公任の編みし拾遺抄またやや後れて寛弘年間に花山院の撰ばせたまひし拾遺和歌集なれど、いづれも戀の部に同じたまくのすきまの風云々の一首を収めたり。

今昔物語いかに古くとも保安年間より先に世に出でたりとは思ひがたく、古本説話集さらに後れて成りしことまた疑ひなし。今昔に先立てること百年に餘れる拾遺抄拾遺集に讀み人知らずとて入れるたまくらの歌に詞書のたぐひつゆ見えねば、花山院の世におはしまししころほひに、右にあらあらまねびし六宮の姫君のことはや知られたりやいなやいともおぼつかなし。そはいかにてもあれ、拾遺抄拾遺集に入れるこの歌あるあてなる女をみなのうき

世に沈みわびぬるはてに風くちずさみのこちにつけてふと口遊し一首なりとおぼしければ、これまた物語歌にて、おほかたのことのさまと心、今昔物語の語れる六宮の姫君とさしもたがひけむとはなかなか思ひがたかるべし。

風吹けば來しかたのふとしのぼるるぞわりなき。昔いとしき夫つまのおとづれしころはたまさかに添ひ寢の枕べを吹く風だにもうたて寒けくぼえしかども、今ただひとりあるかなきかにて、ただうきことの絶へせぬ日々の心ならひには、寒き風さへこととしもおぼえずなりぬれば、げに身のならはしこそあさましけれ。かくすきまの風をよすがにておのが一期を顧るにつけて、うし悲しなどいはむもおろかなり、たとしへなくすすさましき思ひのみ胸につのりきてはかなければせむすべ知らにただふし沈みたるほかぞなき。

たまくらの歌のまことの作者たれなりや、今知らむによしなけれど、かくも深き人の世の悲しみをかくもさりげなく三十一文字に詠み下せしことおぼろげの歌詠みのわざとはえしと思はれず。ことに心をつけて見であるまじきは、身はならはししのといへる四句にて、こはいこもれるあはれの深きことはてしもなし。これげに一首の字眼じげんなりともやいひつべからむ。

(令和八年二月二十六日受附)

